

ウイルス・免疫応答

討議総括

大石和徳

ウイルス・免疫応答のセッションにおいて、3演題が報告された。

1) 赤川らはMCSFで分化させたヒトマクロファージにM-tropic HIV-1を感染させる系において、エリスロマイシン誘導体の効果を検討した。EM201, EM703を添加するとHIV-1によって認められる細胞変性作用が消失し、細胞系のp24抗原測定によるウイルス増殖の抑制が確認された。この作用は、nefの発現に関与するHckの発現抑制とC/EBP β 16kDaの発現増強を介すると推察された。M-tropic HIV-1のコレセプターであるCCR5発現についての質問があったが、この点については未検討とのことであった。今回発表された新知見は、マクロライド誘導体のHIV-1治療薬の可能性を示唆しており、大変興味深い。

2) 二宮らは2歳以下の小児のRSウイルス感

染症症例に対するエリスロマイシン投与の臨床効果を比較した。EM投与群16例と非投与群9例に対して喘鳴の消失するまでに期間を比較したところ、EM群7.9日と非投与群11.6日とEM群の期間が短かった。しかしながら、マイコプラズマなどの合併感染の可能性が問題として討議された。

3) 阿部らは*in vitro*のヒト樹状細胞、CD4陽性T細胞の共培養下におけるインフルエンザ菌P6蛋白質に対する特異的免疫応答系を確立し、このT細胞増殖反応に及ぼすEMの影響を検討した。EMの $\sim 10 \mu\text{g/ml}$ 以下の濃度で、EMはP6特異的細胞増殖を濃度依存性に抑制した。EM存在下で分化させたDCによってもP6特異的細胞増殖を抑制する傾向を認めた。*in vitro*の系で認められた所見が生体内では如何なる意義を有するののかについて議論が行われた。